



TITLE:

<雑録> 章學誠の失敗

AUTHOR(S):

内藤, 戊申

CITATION:

内藤, 戊申. <雑録> 章學誠の失敗. 東洋史研究 1942, 7(2-3): 186-186

ISSUE DATE:

1942-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/138820>

RIGHT:

章學誠の失敗

章氏一代の失策は歴史を實際に書かなかつたことにあると思ふ。

あれ程歴史の著述のことを喧しく論じながら章學誠は結局一編の歴史をも著はさなかつた。尤も書かうといふ意志はあるにはあつたらしい。友達邵晉涵にやつた手紙に「君は宋史を書かうと思つてゐる。さうだが實は僕も書かうと思つてゐる。平生僕が主張する所の歴史の義例なるものが決して嘘いつはりでない事をそれによつて明かにしたい」などと勇ましいことを言つてゐる、所がこの手紙を書いたのが、計算して見ると既に彼が五十八九歳の時である。そして六十四の歳にはチャンと死んで了つてゐる。思ひ付きようが少々遅過ぎたのだ。むろん宋史は書かずじまひである。

若い時から常にその志があり、平生ひそかにその準備をやつてゐたのだが、悲しい哉貧乏暇なしで遂に果さなかつたといふのなら多少恕すべき點もある。所が章氏遺書をチョイ／＼めくつて見てもそれらしい氣配は感じられない。例へば鄭樵を賞めた申鄭といふ文がある。

「一體自分から見れば通鑑などは歴史の部に入らないのだが、何しろ司馬溫公は優秀なる部下を多勢使つてやつたので世の宗

史となれたのだ。それにひきかへ鄭君は區々たる田舎の貧乏學者の身で司馬遷班固以來誰もやらなかつた大事業をやつたのだが、残念ながら名實相伴はず遂に文獻通考なみに片づけられて了つた。けれども鄭氏の書は決して通考の如き纂輯の業ではない、立派な著述の業である」とといふ風な意味のことを言つてゐる。

若し章學誠に實際に筆を取つて歴史を書かうといふ氣がしつかりあるのなら鄭氏を賞める賞め方の重點が自ら違つてゐたうと思ふ。少々の粗陋などに構ふ事なくどん／＼自分の考へを實行に移した所が偉いとか何とかいひさうなものである。他の事では相當こと細かにツケ／＼いふ男なのだから。

私の推量では章學誠は、多くの史學者と同じく實際に歴史を書く積りは殆んどなかつたのだと思ふ。それが友達邵晉涵が宋史を書くといひ出したので慌てゝそんな俺もひとつといふ氣になつたのだが、時既に晚く、それに常日頃その様な準備や訓練がしてなかつたので遂にものにならなかつたのだらうと思ふ。

それにつけても不思議に思はれるのは、學者の手習草紙である研究雜誌に、歴史特に通史を書く爲の訓練的作品が皆無といつていいことである。(但しこれは近頃の日本の國の東洋史學界の話だが)(内藤戊申)